三本松遺跡出土の土器埋設遺構について

川添和暁

平成13年度に刊行された『牛牧遺跡』のなかで、縄文晩期土器棺墓の検討に対して、遺構としての検討を行う視点での報告を行った。今後、縄文時代後期の「埋設土器」をはじめとする土器埋設遺構に関して、比較検討をする必要性が生じてくる。そのための基礎データーを蓄積するための一視点を提示したい。なお、この小論では、すでに報告がなされている遺跡に対して、どこまで埋納形態・過程を検証することができるのか、という一事例でもある。

はじめに

土器が埋設されている遺構には、「埋甕」・「埋設土器」・「甕棺」・「土器棺」・「壷棺」など、その他さまざまな名称がつけられている。これらの遺構は、属する時期・地域・状況などにより、それぞれ別の歴史的意義づけをもって説明され、また互いの関係を対象とした検討も行われている。

これらの遺構に関して、比較・検討する際に必要な項目として、

(1)検出状態
(2)埋設方法(組み合わさり方も含む)
(3)土壙の掘りかた
(4)関係する個体数
(5)土器自体の器種・文様・種類
(6)土器自身の残存率

などがまずは考えられる(以下、これらを項目(1)～(6)とする)。以上の中で、項目(1)・(2)・(3)は調査段階時にしか得られることのできない情報であり、所見からの追認検証となる。

平成13年度に刊行された『牛牧遺跡』のなかで、縄文晩期土器棺墓の検討に対して、遺構としての検討を行う視点から、特に項目(1)・(2)・(3)を重視した(川添編2001)。同時期の土器棺墓に対しての比較研究は目下継続中であるものの、この小論では、縄文時代後期の「埋設土器」をはじめとする土器埋設遺構に関して、比較検討をするための一試論である。なお、この小論では、すでに報告がなされている遺跡に対して、どこまで追うことができるのか、という点でのケーススタディでもある。

ここでは、三本松遺跡で検出された「伏甕状遺構」・「埋甕状遺構」についての検討をしていく※。三本松遺跡は縄文後期後葉から晩期末まで営まれている遺跡で、上記の名称で報告されている遺構が４基検出されている。それぞれの遺構について見る前に、まずは周辺の遺跡を含めて、三本松遺跡全体の概要を見ていく。

1　三本松遺跡について

まずは、三本松遺跡の所在する矢作川中流域を中心に遺跡を外観し、三本松遺跡について詳細を見ていきたい。

矢作川中流域を中心に、縄文時代後期・晩期の主要遺跡を示したのが、図１である。山地から碧海台地に平坦地が広がり、そこには堀内貝塚を最奥とする貝塚群が展開する。三本松遺跡は、豊田市の山間部に位置しているものの、堀内貝塚からは直線距離にして約20kmほどの地点に所在し、海岸部から少し山側に入った場所であるといえる。

当遺跡は、1991年11月から1992年３月にかけて県埋蔵文化財センターによって調査が行われ、

※　「伏甕状遺構」・「埋甕状遺構」の名称は報告者による。ここでは、報告の名称を用い、言い換えはしない。

図１　三本松遺跡と縄文後・晩期主要遺跡分布図（国土地理院発行 2000 万分の１地図「豊橋」より）

図２　SB01 内伏甕状遺構および土器実測図　土器１：４　遺構１：20 遺構図は 余合 1993 より転載
※スケール・出典、以下同じ

すでに報告も出ている(余合編1993)。報告書より遺跡の立地・検出遺構などを追認していく。

三本松遺跡は、愛知県豊田市坂上町、六所山麓北西に所在する。矢作川の支流仁王川の左岸に立地し、標高約220m前後、仁王川との比高差は５m前後と、河川に近い緩斜面上に立地する。三斗目遺跡とは比高差 20m ほどの丘陵を挟んで約500m離れた位置に所在している。遺跡の継続期間が後期末から晩期前半までと考えられ、住居跡１、伏甕状遺構１、集石遺構と思われる遺構３、埋甕状遺構３、その他土坑やピット群が検出されている。報告書内では、遺構の時期的変遷についての言及はないが、住居跡の床面25cm下に凹線文土器の伏甕状遺構があり、その伏甕状遺構と住居跡との直接的な関係は考えにくいとされていることから、住居跡はそれ以降となるのであろうか。

２　「伏甕状遺構」・「埋甕状遺構」の個別遺構・遺物の検討

ここでは、各遺構に対して個別に検討を加えていく。検討は、前に挙げた項目(1)～(6)について焦点を当てる。なお、遺構の時期は、検出された土器から後期後葉から末に属するものと考えられる。

（1）SB01 内「伏甕状遺構」(図２)

この遺構は、SB01床面レベルの25cm下から検出された遺構である。報告者はSB01との直接関係は考えにくい、としている。検出状況が以上のことから、遺構自体は後世の攪乱を受けず、比較的良好な状態で残存していたものと考えられる。この遺構に関係する土器個体数は深鉢形土器１である(図２－１)。土器の埋設は、逆位である。土器の中心部には直径15cmほどの平たい丸石が検出され、この遺構を構成する一部であると考えられてる。報告内では、「石を覆うように土器が置かれたのか、土器をつぶすように石が置かれたのかははっきりしない」とされている。土器・丸石を埋める土壙の堀りかたは不明であるようだ。

１は復元口径 38.5cm、復元最大径 37.5cm、残存高 26.2cm を測る。口縁部から 2.5cm で屈曲し、そこからは底部に向かって逆ハの字形につながる器形である。口縁部外面には３本の巻貝凹線の見られ、口縁端部上端から施文されているようである。胴部の調整は、外面が横および斜方向、内面が横方向の巻貝条痕である。口縁端部は面取りされており、土器整形時に端部上面に浅い押圧痕が連続して見られる。この土器は、胴部下半部を欠失させたと考えられ、口縁部を中心に残存している。全周に対する残存率は４分の３程度で、その残存部分でも欠落している部分が見られる。

図３　SK15・SK08 出土状態図および出土土器

図４　SX03 出土状態図および出土土器

（2）SK15「埋甕状遺構」(図３上)

この遺構も高さのあるレベルまでは、攪乱を受けていない状態であった、と考えられる。それは、一部土器片が錯綜している部分に関して、攪乱ではなく土圧により潰れたかの状況であった、とのことからである。土器個体数は深鉢形土器２個体である(図３－２・３)。土器の埋設は、２が不明、３が正位である。土坑の堀りかたは検出されており、長径65cmほどの楕円形プランで、深さ25cmを測る。２は、復元口径21.5cm・最大径24.0cm・残存高22.2cmで、４単位の波状口縁を持ち、波頂部から７cmで屈曲し底部かけて逆ハの字形につながる器形である。口縁部には、極めて細い工具により波頂部から垂下する幅１cmほどの平行沈線のなかに右上がり斜方向の沈線を充填している。さらに上放は４条、下放は３条の背反する弧状沈線を施文している。口縁部の調整はナデもしくはミガキで、胴部の調整は外面が横および斜方向、内面が横方向の巻貝条痕である。この土器は、底部を欠損させたと考えられ、胴部下半までは残存している。土器全周に対する残存率は、部分的に欠失しているところもあるが、ほぼ１分の１である。

３は、復元口径30.5cm・最大径33.0cm・残存高29.5cm、口縁部方向に若干内湾もしくは直立する砲弾形を呈する器形である。外面には４本の巻貝凹線が見られ、口縁端部下から上端側へと施文されているようである。胴部の調整は、外面が横および斜方向の巻貝条痕、内面がナデである。この土器は、胴部下半部の残存が主となり、口縁部は若干のみでかつ胴部とは接合しない。また底部も欠失している。全周に対する残存率は２分の１程度である。

（3）SK08「埋甕状遺構」(図３下)

この遺構自体は、上部が後世の削平を受けている、ということである。関連する土器個体数は深鉢形土器１個体である(図3-4)。土器の埋設は、正位であった模様である。土器内には長方形の石版?が検出されている。長径１m50cmを測る楕円形状の平面プランの土坑の掘り方が明示されているものの、土器埋設時の掘り方であるかどうかは微妙であろう。

４は、復元口径27.0cm・最大径28.8cm・器高37.0cm、底部から口縁部に向かって、高さ３分の１づつで緩やかに屈曲し、口縁部では内湾をする器形で、底部から13cmほどの高さの屈曲は、若干Ｓ字状にくびれているのかもしれない。文様のみられない無文土器で、外面調整が口縁部付近では細密な浅い条痕、胴部は斜方向にケズリがみられ、底部裏も細密な浅い条痕による調整がなされている。口縁端部は面取りがなされ、外面には粘土の接合痕が若干残り、底部外面は整形のための指によるオサエが連続して見られる。残存状況は、口縁部側から底部側にかけて良くなり、口縁部では1/8・胴部上半で1/2・底部で完存である。

（4）SX03「埋甕状遺構」(図４)

この遺構の直上は表土に近く、後世の削平を受けたものと、考えられている。若干土器片が錯綜した状態になっているのは、土圧によるものではないのか、とのことである。関連する土器個体数は深鉢形土器３個体である(図4-5～7)。土器の埋設状態は、横位の状態で土器片が重なっている模様であるが、どの個体がどの位置に埋設されていたのか、また、同一個体土器片による重なりがあったのか、などは不明である。土坑の掘り形は検出できなかったようである。

５は、復元口径40.8cm・最大径41.1cm・残存高29.4cm、胴部中央でＳ字状にくびれ、口縁部付近で屈曲する器形である。無文土器で、器面内外面には横および斜方向に巻貝条痕が施され、面取りが見られる口縁端部上面にも条痕が施されている。粘土の接合部分と思われる部分で凹凸が見られる。残存状況は全体の1/2程度で、底部は欠失している。胴部下半の外面には炭化物の付着痕が見られる。

６は、復元口径32.8cm・最大径34.5cm・残存高18.0cm、口縁部から胴部上半までの残存であるため、全体の器形の復元はできないが、口縁部で「くの字」に屈曲し、胴部下半でＳ字状にくびれるのかもしれない。口縁部には２本の平行する凹線が見られる。土器内外面とも表面の劣化が甚だしい。口縁端部上面には面取りがみられ、整形時に浅い押圧が連続して見られる。残存部分は、口縁部から胴部上半までで、全周に対して約1/6程度である。

７は、復元口径37.2cm・最大径38.3cm・残存高28.9cm、胴部で膨らみ、口縁部で内側に「く

図５　SB01 伏甕状遺構検出土器(1)破片残存状況図

の字」屈曲の見られる器形である。文様は口縁部と胴部に見られ、工具はすべて半截竹管である。口縁部は上部に２条の平行沈線、下部には３条の下放弧文を口縁部側から頸部側に施しており、さらにそれを時計周りに全周させている。胴部には３条の平行沈線が施されている。調整は全面ナデと考えられる。残存状況は全体の1/2程度であるものの、口縁部の残存がよりよく、胴部には欠失部が多く見られる。底部は欠失している。

3　土器埋設遺構について

「伏甕状遺構」・「埋甕状遺構」と報告されているこれらの土器埋設遺構について、もう少し詳細に検討を加えていく。上の４基の遺構について整理すると、以下の表のようになる。この中でいくつかの問題を検討していく。

縄文後期の土器埋設遺構に関しても、土坑の掘りかたがよく分からない例があることが分かる。この特徴も注目されるべきであろう。

表１　各遺構の分類

項目／遺構	土坑の掘り方	土器以外の構成物	埋設状況	関連土器個体数	遺物番号	底部	土器自体の残存率
SB01内伏甕状遺構	検出できず	石	逆位	1	1	欠失	3/4
SK15埋甕状遺構	検出	なし	正位	2	2	欠失	1/1
					3	欠失	1/2
SK08埋甕状遺構	検出	なし	正位	1	4	あり	口縁1/8 胴部1/2
SX03	検出できず	なし	横位	3	5	欠失	1/2
					6	欠失	1/6
					7	欠失	1/2

複数個体の組み合わさった遺構が二つ見られる。SK15は３のなかに２が入れ子状態になっている可能性も考えられる。しかし問題となるのは、２の埋設状態である。検出時には潰れたような状態になっている。しかし、結果として潰れたような状態になった要因としては、土圧を受けて容易に潰れやすい状態での埋設であった可能性はまったくないであろうか。

埋設状態は立位(正位・逆位)が多い。横位としたSX03は、それ以外の３遺構とは遺構の構成上、大きく性格が異なる可能性がある。ここで検討しなくてはならないことは、構成してる３個体の土器(片)がどのように重なり合っているのか、ということである※。出土状態図・写真および現在観察可能な遺物の残存状況から、図4の土器片Ａにあたるのは７の一部、土器片Ｂにあたるのは５の一部であると考えられる。５は出土した３個体の中で残存部分が最も多くみられるもので、この土器が遺構の構成上、主体になっていたと考えられる。残存土器片Ａは口縁部が西方向に向いていることが伺えられる。この土器片Ａが土器片Ｂ同様に、土器片器壁内面を上側に向けていることが、この遺構の性格を考えるのに注目される点であろう。

また土器自体の残存率を提示した。底部の欠失は、多くの個体に見られ土器の欠失部分がみられる要因として、後世の攪乱であることがまずは容易に想定できる。これに関して問題点が

※　ここでいう「どのように重なり合っているのか」ということは、どの個体の土器の、どの部分が、どの順番で重なっていたのか、ということを示している。この遺構は表土に近く、上面が後世の削平を受けたものと考えられるが、このことの分析ができれば欠失している上半分へのつながりがより具体的に想定できたものと考えられる。

二つある。一つは、全周するものが少ないことに関してである。胴部などどこかの部分でも全周するものは、SK15の2のみである。特に「SB01伏甕状遺構」は住居跡床面下にあって後世の攪乱の影響が及んでいないと考えられる状態の遺構である。それでも全周は残存はしてない(図5)。また、土器自体の残存率を提示しても、その残存している部分内で欠落している部分がある、ということもしばしば見られることである。これは、検出時および取上げ時に取りこぼしが見られたことも考慮にいれなくてはならないが、それで全てが説明できるかは、実際には不明である。

4　遺物自体の検討

埋設土器の土器自体の選択についての検討としては、その器形なり文様を有する土器がその遺跡内でどの程度の割合にのぼるのかが、まずは考慮されなくてはならないであろう。報告の関係上、無文土器の実数が不明であるため、その土器全体での割合を提示することはできない。有文土器の中のみに関していえば、1・3・6は包含層出土土器にも多く見られ、有文土器の中では一般的な土器であったと思われる。2・7に関しては、文様意匠として類似のものは見られるが、同様の文様のものとしては報告されている土器片には見られない。このことから、特に2に関しては、選択して入れられた可能性も考えられるであろう。また、ほぼ全ての土器の内外面胴部下半に煮炊きの痕跡や炭化物付着の痕が見られる。

5　今後の方向性

今回は、特に考察結果を提示するものではなく、今後行う縄文後期の土器埋設遺構の検討方法を提示し、批判を乞うものである。どの土器が、どの場所に、どのような組み合わせをして、どのような埋設状態をしていたかという検証は、この類いの遺構に対する埋設過程を明らかにできると考えられ、是非とも必要な情報である。遺物として保管されている土器の残存状況から、ある程度の検証が可能であることが分かった。ただし、埋設方向など、検証の追えない事項も浮かび上がり、そこが今後の問題点になろう。特に、検出時に土器の形状が伺えることができない場合、土器の組み合わさり方が不明瞭になってしまう。その後、調査後の復元作業の結果、予想以上の復元個体数の土器が関係していた、という場合がしばしばみられる。そのような事例こそ、抽出できる情報が多く、どの土器片がどの位置に存在していたのかを検証できなくてはならないであろう。

また、埋設土器の土器自体の選択についての問題を考える上で、無文土器を入れての、その土器の出土土器全体に対する割合の検討がどうしても必要となるであろう。

参考文献

川添和暁編　2001『牛牧遺跡』（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第95集）愛知県埋蔵文化財センター
立岡和人　2000「近畿地方における縄文晩期土器棺の成立と展開」『第2回 関西縄文文化研究会発表要旨集』関西縄文文化研究会
余合昭彦編　1993『三斗目遺跡・三本松遺跡』（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第47集）（財）愛知県埋蔵文化財センター
森川幸雄編　1995『天白遺跡』三重県埋蔵文化財センター